

ISSN 0289-9302

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN

KOΣMOΣ

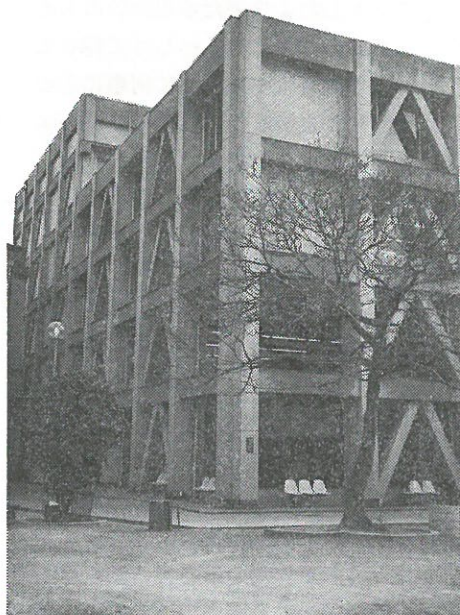
コスモス No. 85 1989 春

特集

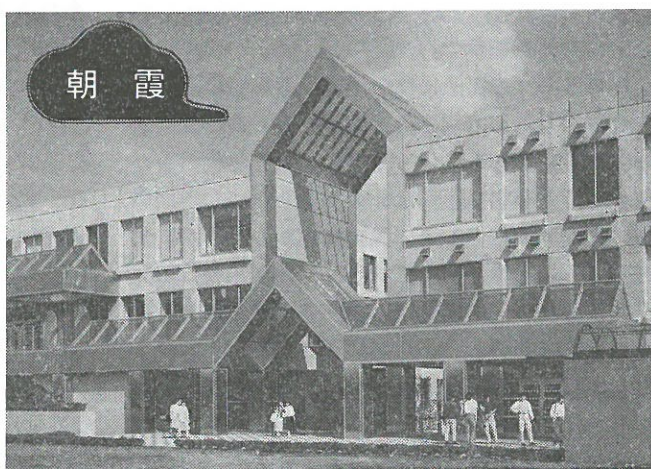
情報は図書館から

—あなたも常連になりませんか—

白 山



朝 霞



川 越

貴重書から

くしき 志くしき集語

坂 詰 力 治

本書は、表紙の『くしき／志くしき集語』という書名から窺知し得るように、古語としての形容詞を集めたものである。古語形容詞を取り扱ったものとはいえ、文法形態という国語学的観点から厳密になされたものではなく、あくまでも語彙レベルによる古語形容詞の意味とその語の出典・用例などを示した、一種の用例集のような内容となっている。

本書の体裁を示す。

本書は一つの冊子にはなっているものの、メモ的なもので、形容詞語彙用例集なるものを意図した草稿段階のものといってよい。制作年代および制作者は、奥書識語がないので詳らかにし得ないが、書名・料紙・筆墨の具合などから、江戸時代末期ごろのものと判断される。縦25糎、横17糎、粘葉装。表紙は本文共紙で、左肩に『くしき／志くしき集語』と書名が墨書されている。また、表紙の右半面には、

鎌倉右大臣家集

み 郭公なく聲あやな五月やミきくひとなし
ミ雨ハふりつゝ

(以下、略)

のような「み」のつく形容詞の用例の書き込みがなされており（裏表紙にあたる部分にも書き込みが見られる）、本書が草稿段階のものであることを示している。

本文部は、青色囲み罫に21行の縦罫を施して料紙を二つ折りにした半丁10行の全24丁より成っている。本文は、1丁表から、いろは順に形容詞語彙を上下二段に並べ、「くしき／志くしき活」（ク活用）を先に、「志くしき活」（シク活用）を後に掲出して、一語一語には時に墨および朱で当該語の

出典や用例を書き記している。

その形式の一端を示すと、次のようである。

いの部 くしき／志くしき活

鬱悵

いぶせき 万（葉集） たらちねのはゝがかふ
このまゆごもりいぶせくもあるかい
もにあはずて 別帋（紙）（1表）

志くしき活

いたハしき 【朱書】（源氏）夕顔 身もいた
ハしくかたじけなくおもほゆべかめ
れバ（1裏）

本書本文の基本的な記述の形式は上のようなのであるが、行間の余白や欄外に出典・用例の追記をつぎつぎとした箇所が多数見られ、さらに、本書には多くの付箋（朱書）が存し、それら付箋の記述内容は、次に例示するように、当時の諸注釈と思われる書を多く引用して、一段と詳しくなっている。こうした点からも、本書がメモ的な草稿段階のものであることを知るのである。

いミしき 語釈圃こゝにハ嚴重（イカメシキ）
こゝろにハベリ此語のもとハ斎（イミ）
じきにて甚大事なとある時物い
みつゝしむより書たる也（圃）ひのもと
ハ此説のごとくなるべしさて轉りて
ハ甚しき事大なる事に何事にもわ
たりてことひろくつらひたり譯ハエ
ライヒドイキツイなどいふにあたり
りされども此語ハ其さしたる所によ
りてかゝる事もありてしが一ト向キ
にハ定めがたし（付箋）

本書に引用した出典は、奈良時代から江戸時代までに及ぶ数十点で、そのジャンルも、物語・日記・随筆・歌集・歌論・辞書・注釈など極めて広範囲にわたっている。

本書がいかなる意図のもとに書かれたものであるかを明確にはし得ないが、以上のような形式・内容から、本書は古語形容詞のみを集めた一種の要語用例集作成を意図した草稿本であるといえよう。そして、いかなる人物の手に成るものかも知る由もないが、掲出語や出典などから、少なくとも

も当時訓詁注釈に携っていたものの手に成るものと判断して間違いないであろう。

ところで、本書の資料的価値はどんなところにあるのであろうか。それを明らかにすることは、上述したような本書の形式・内容の事情からなかなか困難である。けれども、本書を形容詞研究史の上に照してみると、いささかその価値が見えてくる。すなわち、次の二点である。

一つは、形容詞の語彙レベルによる、表現論上あるいは意味上の考察は、早く中世末期までにおこなわれていたものであったが、本書のような形容詞語彙のみを取りあげ、各語に出典の用例や注記などを加えて整理することを試みたものは他にほとんどなかったのではないかと推察され、その意味において注目されるということである。二つは、形容詞の分類を活用という形態的観点からおこなっているということである。これは極めて意義深いことである。形容詞に対して活用の観念が照射されるようになるのは江戸時代以降であるが、本書の書名にあるような「くしゝき」「くしゝき」という活用形式から二つの形容詞を取りあげたのは、東条義門の『山口栞（やまぐちのしおり）』である。義門の形容詞の研究は、本居春庭がその著『詞通路（ことばのかよいじ）』でやり残した形容詞についての論を整理し発展させたものであるが、本書『くしゝき／志くし志き集語』の表紙裏には、

通路中三十二ニ云り加行の活用にてくあの約りてかといへることいと多しこはすべてくしきの

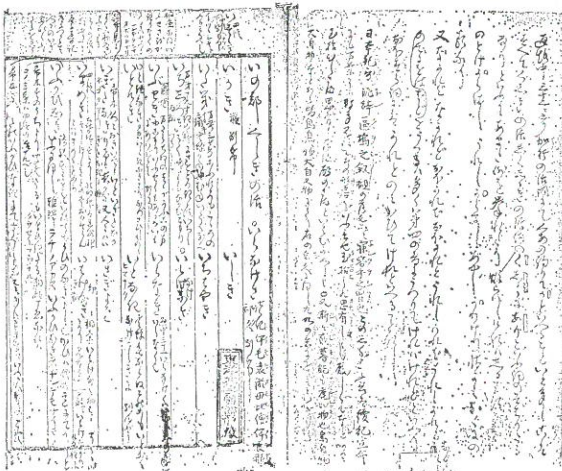
活しくしゝきの活詞のくしくにありといふ詞のそはりたるなりといふにあまた例を挙げしに煩らハしければしるさず

のとけからまし うれしからまし あやしかりけり 惜からなくにの類なり

というように、春庭の『詞通路』の「詞の延約の事」の中に示されている「つゞまりたる詞の例」の一部分が引用されており、ここには義門の『山口栞』で整理されることになる形容詞、具体的には今日のカリ活用の「クア」が「か」になることについて触れられており、この部分に本書の作者が目を向けていることは注目すべき点である。本書が単に古語の形容詞を語彙レベルで取り扱うことを主眼としたものであるとはいえ、活用という形態面からの認識がすでにそこにあったことをうかがわせ、しかも、江戸時代の形容詞研究の一大成果として、形容詞研究史上、画期的なものとされる『山口栞』に拠らず、『詞通路』を引用しているということは、この草稿本が『詞通路』（文政11年<1828>の序）と『山口栞』（天保7年<1836>初刊）との間の時期に書かれたのではないかということ推定させる。

いずれにしろ、本書は、古語形容詞の意味や出典などを明示しまとめた一種の形容詞用例集といえるようなものであるが、語の分類に活用という形態的観点が導入されていることは、形容詞研究史上、興味ある価値を有するといえよう。

（文学部教授 さかづめ・りきじ）



（注）例文を引用するに際して、次のような改変をおこなった。濁音を有する語で、原文に濁点のないものについては濁点を施した。（ ）および〔 〕に示したものは、筆者が補ったものである。原文の踊り字については、横書きの都合上該当文字を繰返した。

特集 情報は図書館から

——あなたも常連になりませんか——

図書館は諸君を誘う

里 道 徳 雄

東洋大学図書館は諸君を待っていた、と言うと些か大袈裟であるが、そうではない。図書館が知の体系をもって大学教育研究機関の中心であることは言う迄もないが、諸君の利用を待って大きく発展を続けていくからである。東洋大学図書館は創立以来百年、哲学堂文庫を軸として70万冊に及ぶ書物を蔵している。これは総合大学としての巨大な“知の体系”を示すと同時に、この書物群を育てて来た井上円了博士を始めとする歴任教職員・14万同窓生が築いて来た伝統遺産であった。研究書の集成もさることながら、貴重書を多く収蔵し、雑誌類も白山だけで7,000タイトルを超えている。哲学堂文庫は学祖蒐集書を多く含み、その主体となっている江戸板本の山は、今や他に類稀な貴重文庫となっている。他にも中島文庫、宇野文庫、龍山文庫、湯本文庫などの特殊文庫を有する。諸君はこれらの資料に直参し研究することが出来る。若し資料に不足する時があれば、他の図書館との相互貸借が可能であり、購入希望票を提出して揃えてもらうことが出来る。図書館は諸君の研究に応じてくれる筈であり、参考文献コーナーは君達の知的好奇心を刺激して息まないであろう。倦まずたゆまず図書館を利用することこそ、諸君が新たな図書館の蔵書形成に参加することである。さあ諸君は、すぐにも図書館へ入ってみよう。並いる図書を閲兵しよう。どの書物でもいいから目に止った書物を手にとってみよう。カバーがあったらカバーを取って頁を開いてみよう。古めかしい革装書は君達に古典の重みを印象づけるであろうし、クロース装書は最新の学業の香

りを伝えよう。諸君は臆することはない、これらの書物の著者達と交り語りあって自己をつかみ給え。書物は諸君に語りかけてこそ生命を持つ。諸君は先人の思索の跡を検証し、自己の問題を解決する喜びを味わい、新しい知的世界をそこから汲み取っていくこととなろう。わが新“東洋人”諸君の懸命で真摯な図書館の利用と、図書館資料との対話を期待する。

(文学部助教授 さとみち・のりお)

〈白山図書館から〉

キャンパスの南門を通りすぎずにふりむけば、白山図書館です。入口は階段をあがって2階から、本にたどりつく前に大きな目録ケースがあってまぎびっくり。カウンターはその先にあります。

白山図書館の開架図書はわずか5万冊です。それでも良くみると特徴があります。開架書庫に入って左、本学の「教職員著作コーナー(寄贈本)」があり、研究書やエッセイなど、著者のアルファベット順に並んでいます。隣りは学祖の「井上円了著作コーナー(複製本)」です。

第3閲覧室奥には軽読書コーナーがあります。手続きなしで、手に取って読めます。ここで仕入れた情報は、あなたの話題を豊富にし、友達との会話もはずむでしょう。

開架書庫には、専門書・古書・貴重書など45万冊があります。

閉館時間は21時30分(土曜は20時)です。

歩いてみると、もう一度来てみようと思うようになるであろう。それはいまはやりのウオッチングをすることであるとも言える。

(経営学部教授 さいとう・ひろゆき)

図書館ウオッチング

斉 藤 弘 行

どこかの大手の百貨店の社長が、自分の店が情報の発信場所である、ともう何年も前に言っていた。店に来る人はただ品物を買いに来ただけでなくて、何か別のサービスを求めているのだということも含まれているらしい。あるいは店に入ることによってそのときの世の中の流れ、もしくは流行といったものを人は知ることができるというのかもしれない。実際にこの店は書籍売場を拡大して、これまでの百貨店の売りかたと異なる方向をとった。もちろん大いに繁盛している（その場合は商品となっているけれど）。ところで図書館も情報の発信地だということに異論はないけれど、たまには利用する者として、本当に行きたくするような情報に満ち満ちているかどうか分らない。今日ではいうまでもなく本ばかりでなく、目も耳も一緒に使う最先端の機器が置いてあるからそれなりの情報が得られる。しかしもっと積極的にこちらの側から何かをねだってみたいかながなものであろうか。例えば、野球がこれほどにアメリカで流行したのは、南北戦争のとき捕虜になった相互の兵士が野球を教え、それを習った人々が全国に広めたと聞いたとき、そのことは一体どこに書いてあるのかと思わずアメリカ史を見るために図書館のどこかの棚を探してみる。たとえ見つからないとしてもそれでアメリカ史が好きになればよい。また、ほぼ2億年くらい棲息し続けた恐龍が今から6500万年前に突然絶滅したのは巨大な隕石の衝突のためだとする説を近ごろよく聞くようになったが（近ごろ小学生でも知っている）、それをどこかの棚に当てみるのも楽しくなる。難しい数式のない科学的知識がたくさん手に入るかもしれない。天文・地質・気候などについての情報が併せて手に入る。といったことなどを求めてあまり肩肘を張らないで図書館の中をさまよい

＜朝霞分館から＞

噴水を右に見ながら四聖像の前を通りすぎ、階段を上るとそこが図書館の入口です。昭和61年に新築された朝霞図書館は、蔵書冊数約10万冊。図書を自由に閲覧できる開架方式、最新設備を備えた視聴覚室を大きな特色としています。

★開架方式は便利！★

1階から3階の書架に整然と並んだ一般図書・参考図書・雑誌、2階の新聞コーナー等、全て自由に手にとって閲覧できます。納得いくまで自分の目で確かめ吟味しながら、本当に必要な情報・知識をどんどん吸収して行って下さい。

★視聴覚(AV)室って？★

個人視聴室では当館所蔵の資料を自由に選んで「視」たり「聴」いたりできます。音楽CDや各種教材テープ、映画ビデオなどメニューは豊富。“お気に入り”があるかも…。

隣の小ホールでは各種の催物が開かれます。あの時見逃してしまったあの映画、大好きなアーティストのライブ、クラシックコンサート、時には落語 etc…。あなたの「視」たかった、「聴」きたかったものがスクリーンに登場するかもしれませんよ！

いかがですか？“百聞は一見に如かず”です。実際に足を運び、館内のしくみや利用のしかたをしっかりと覚えて、あなたなりの“朝霞図書館を楽しむ法”を見つけてみては……。



「本相」が分る 人間になろう

笠原英志

音は耳を通り抜ける、成熟する間がありません。CRTは冷たい、マクドナルドの味でしょう。オフクロの味、同じイモの煮っころがしに微妙な味の違いが楽しめれば、人生の深みも増すというもの。オフクロの味で情報を伝えてくれる、それが「本」だと思います。

本は歩いてきません。こちらからアタックしよう。街の本屋に入って、棚をズーッと眺めて、適当に（いつものマンガは無視）一冊抜き出して、パラパラと見て戻す。（買うとお金がかかる）

さて図書館にいきましょう。図書館はタダだし、教室より椅子も雰囲気もよく、暑くなれば冷房も入ります。（眠かったら少し居眠りをするのもよい）まず雑誌がいい。興味のありそうな数冊を持ってきて、あれこれと拾い読みをする、あまり長くない記事に面白いものがあります。

しばらくたったら、次は書棚へ。適当に何冊か抜き出して座席へ。全部読み通す必要はありません。始めを読んでピンとこなかったら中頃を、そして最後のあたりを。うまく面白そうだと思う本にぶつかったら、借り出してゆっくり読む。

できれば毎日きまったコースにするのがよいでしょう。コーヒーを一杯飲んで、それから図書館へという風に。

こうして何か月かたって再び街の本屋に行くと、ズーと棚を眺めたとき、ピカピカッと信号を送ってくる本がありませんか。手にとってどこかの頁を読んだとき、心にすっと入り込むものを感じる本がありませんか。こんな本があったら、それは君にとって「心の友」です。オフクロの味の情報を与えてくれる本です。そしてその時、君は「本相」（本の人相）を見ることができたといえます。

レポートを書くためにも図書館を利用して下さい。でも図書館をそれだけにおわらせないで下さい。

い。情報の洪水の中から自分と相性のよい本を、自分で見つけ出すこと、それこそ人間の知性であり、それは図書館に親しむことから始められます。

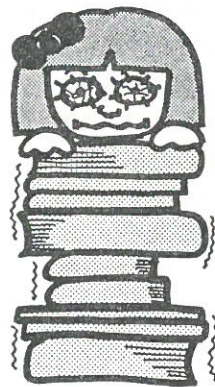
（工学部教授 かさはら・ひでし）

<工学部分館から>

大学での勉強の仕方はただ教えられたものを受け入れるだけではなく、自分から進んで幅広く知識を得ることが必要です。特に工学部の学生は専門だけに偏る嫌いがあるので、人文科学・社会科学等の教養書をも努めて読むように心がけ、豊かな人間性を養って下さい。

工学部分館は2階の開架閲覧室に主として和書が配架されています。工学の専門書、人文・社会科学教養書、各種の雑誌、語学用辞書、各種事典、地図等がありますが、自由に手に取って見ることができます。1階の閉架書庫には、洋書、雑誌のバックナンバー、あまり頻繁に利用されない図書等があります。書庫に入る時はカウンターで手続きを取って下さい。

一週に2回、2階のロビーで学生のためのビデオの放映を行います。工業関係の映像が中心ですが、企業紹介等にも力を入れています。親しまれる図書館を目指して館員一同努力していますが、皆さんも利用者としてのルールを守り、秩序ある利用を行って下さい。なお、分らない時はカウンターにお尋ね下さい。



レファレンス・ケーススタディ (5)

コツコツ調べるためのコツ (2)

調べを進めるためのもっとも簡単な方法

先日こんな質問がありました。

『『岩波講座 日本文学』の第7巻に入っている橋純一著「竹取物語の再検討」の発行年月日が分からないだろうか」というものです。

調査を進めるために、質問の内容を要素別に、下線の引いてある部分に分解し、その組合せを作り、各マス目に考えられる参考図書や本の種類を記入していきます(下図参照)。問題によってはマス目に入るのは目録や年表ではなく、事(辞)典や索引、ハンドブックなどのこともあります。

また、マス目に入るような本があるかどうかからなくても

図書館 あ・ら・かると

図書館の入口を入ると、先ず目につくのが大きなカードケースです。この中には、目録カードといてそれぞれ、書名・著者・件名(主題)・分類(数字)別のカードが入っています。図書を探す手段です。

一般的には、必要な書名から引く書名カードや著者カードが引き易いですが、件名といて例え

ば、「都市」という言葉のカードを引くと、そこには、地理学とか、地方自治とか、社会学とか、工学とかさまざまな「都市」に関する情報の図書カードがファイルされています。いろいろ読んでみるのも、知識が広まって楽しいものです。

目録カードを引くことに抵抗を感じたり、わからないことがありましたら、気軽にカウンターに聞いて下さい。三館どこでも利用できます。

この号を読み終ったあなたは、もう図書館の、常連(?)